

不登校であった中学2年生の生徒が通級による指導を活用することによって、在籍学級への復帰を目指した支援の事例

1. 事例の概要

A生徒は、B中学校の通常の学級に在籍し、通級による指導を受ける中学2年生である。家庭環境が複雑で、小学生のころから不登校状態が続いていた。A生徒は、集団活動の経験も少なく、対人関係や集団参加に不安の強さがうかがえた。

A生徒が中学校に就学するに当たり、保護者から「少人数の場面であれば、登校できるかもしれない。」との申出があった。不登校が続いていたこと、検査により認知のアンバランスがみられること、小学校段階の学習が定着していないことから、A生徒は通級による指導を受けることとなり、その結果、不安や緊張が低減し、徐々に登校できる日数も増えてきた。

本事例の成果としては、A生徒は通級による指導を通して教員との信頼関係を築き、自立活動の指導を行い、基礎的な学習を定着させることによってA生徒の自信を回復することができた。現在では、通常の学級で授業を受け、合唱コンクールなどの行事にも参加ができるようになっている。

キーワード 不登校、通級による指導、在籍学級への復帰支援

2. 生徒の実態

A生徒は、B中学校の通常の学級に在籍し、通級による指導を受ける中学2年生である。家庭環境が複雑で、小学生のころから不登校状態が続いており、集団活動の経験も少なく、対人関係や集団参加に不安の強さがうかがえた。

知能検査の結果、知的な遅れはないが、認知のアンバランスさがみられた。また、A生徒が興味のある話題については、自分からたくさん話しかける様子がみられた。

A生徒は、小学生の学習も十分に定着していないため、在籍学級で学習することへの不安は大きく、受けられる授業は限られたものになっていた。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- B中学校のあるC市では、通級による指導（情緒障害）を市内4校で行っている。また、教育相談室を設置し、障害のある児童生徒の状況に応じた指導の充実を図っている。【基礎1】
- C市では、市の教育相談員（臨床心理士）及び発達相談員が担当校を決めて、各学校に週1回巡回し、発達の課題のある児童について、行動観察を行ったり、保護者と面談を行ったりしている。また、校内委員会にも参加し、支援策を検討している。【基礎2】
- B中学校では、対象生徒の担任及び通級による指導担当者、特別支援コーディネーターを中心として個別の指導計画を作成している。作成に当たり、担任及び通級による指導担当者、スクールカウンセラーによるアセスメント結果に加え、保護者等との面談等を実施して作成している。また、作成した個別の指導計画は教職員で情報を共有して校内支援体制の充実を図っている。【基礎3】
- B中学校では、通級による指導で使用する教材については、生徒の障害の状況

や実態等に合わせて決定している。また、基本的に生徒の在籍学級と同じ教材を使用している。【基礎4】

4. 合意形成のプロセス

A生徒が中学校に就学するに当たり、保護者から「少人数の場面であれば、登校できるかもしれない。」との申出があった。A生徒への指導は、通級による指導の申請も視野に入れ、通級による指導担当者が対応した。その結果、A生徒の不安や緊張が低減し、徐々に登校できる日数も増えてきた。保護者は当初、通級による指導がA生徒にとって有効かどうかについて悩んでいたが、A生徒の登校日数が増えたことで、正式に通級による指導を受けることへの合意形成ができた。

5. 合理的配慮の実際

- A生徒が在籍する学級の学習や活動を把握できるよう、定期的に在籍する学級の担任との面談を行う場面を設け、A生徒が在籍意識をもてるよう配慮している。【合理①-1-1】
- 行事等については、事前に通級による指導で必要な指導を行い、A生徒が、参加が可能であれば、部分的にでも参加できるように調整や配慮を行っている。【合理①-1-2】
- A生徒は、同学年の生徒とコミュニケーションをとることが苦手であるため、週1時間程度の小集団学習を行い、同学年の生徒と触れ合う機会を作った。また、在籍学級の生徒も数人ずつA生徒と関わる場面を設定し、コミュニケーションがとれるように配慮している。【合理①-2-1】
- A生徒が、週1回、スクールカウンセラーとの面談を行えるよう調整し、A生徒の心理面の安定を促せるように努めている。【合理①-2-3】
- A生徒は通級による指導を受けるために登校することが精いっぱい状況であった。そのような中、A生徒の在籍学級の担任と通級による指導担当者が情報共有しながら、A生徒の実態把握や指導内容についての検討を行い、A生徒の背景にある発達の違いを想定した対応策を考えている。【合理②-1】

6. 本事例の成果と課題

本事例の成果としては、A生徒は通級による指導で教員との信頼関係を築き、自立活動の指導を行い、基礎的な学習を定着させることによって自信を回復することができた。現在は、通常の学級で授業を受け、合唱コンクールなどの行事にも参加ができるようになった。また、A生徒の在籍する学級の生徒達は、学級担任とともにA生徒を温かく見守り、A生徒にとって居心地の良い環境を整えている。さらに、保護者もA生徒の学習面とコミュニケーションの両面に大きな成長を感じ、授業公開日には毎回参加して学校と連携を図ることができるようになった。

課題としては、A生徒が通常の学級で学習に参加できる場面は、まだ限られている。A生徒に必要な支援を行うことで、保護者との信頼を築いてきたが、A生徒の発達の異なる点については、保護者に十分に伝えられているとは言えない。今後は、A生徒の成長や学習の成果を確認しつつ、保護者のA生徒への理解について、更に話し合う必要がある。